

満州

思い出すままに！

私の満州引揚記録

北海道 斎藤 コウ

はじめに

平成十三（二〇〇一）年の九月にアメリカ最大の都市、ニューヨークで起きた無差別テロ事件がもとになって、アメリカはテロ国家・テロ組織に対する報復手段をとりはじめて、アフガニスタンやイラクなどに対して軍事力が発動され、そして血なまぐさいニュースがテレビや、新聞などを通じていろいろと伝えられるようになってきました

た。

戦争や、武力衝突などから生ずる悲惨な有様は、世界中の人々だれもが知っているはずなのに、なぜ世界は平和な世の中になることができないのでしょうか？ 六十年前も前に起きた戦争で日本が敗戦国となり、その結果残酷悲惨な逃難行を余儀なくされ、引揚げという犠牲を強いられた私には、戦争による苦しみは嫌というほど骨身にこたえていて、戦争のことは見聞きすることは耐えられないことです。

私たちが体験した労苦は、幼い子供たち、年老いた両親、そして、弱い女性が一番に被ったものでした。こんな愚かな結果しか生みださない悪の塊である戦争が、なぜ止められないのでしょうか

か。久しく私の脳裏から遠ざかっていた思いが、あのテロ事件以来、再び記憶の底から呼び戻されていた折、満州からの引揚げの体験を、現在及び将来の人々に書き残し、戦争のもたらす罪悪というものがどんなに酷いものであることか、そして戦争のない平和な世の中というものがどんなに有り難いことであるかを訴えるために、『平和の礎』に体験記を書いたらというお薦めがあつて、八十六歳の年寄りが、すっかり薄くなり忘却のかなたに向かいつつある記憶を呼び戻しながら書くことを決心しました。

今までの八十数年間、人様に読んでいただくような文章を綴るなどということをしたことのない私には、どのようにして書いてよいのか分からず、ただ思い出したことをそのまま書き並べたというだけのつたない文章ですが、平和な世の中を築くための一助にでもなればと思つております。

一 渡満以前の私の生活

私は大正六（一九一七）年二月に、山形県米沢

市大小屋という田舎の地で、八人きょうだいの末っ子として生まれました。上の七人は全部男の子だったので、一番末の子が初めての女の子とあつて、両親は大変に喜んで大事に育てられました。

家は、二町歩ほどの田圃で米作りを主としている農家でした。当時の東北地方の農家としてはまあまあで、何とか生活をする事ができていたようです。地元の小学校で六年を終えると補習科に進学し、四年間を過ごし、午前中は普通の学科の授業、午後は女性として一番大切とされていた、和裁を主とした家事万端を習っていました。当時は和裁ができるということは、お嫁に行く必要事件だったので。

補習科での四年も、あつと思う間に卒業となりました。母は私の幼いころに病気で亡くなつて、母の顔は写真で知る以外にはありませんでしたし、父は私の卒業を見届けるようにして亡くなりました。小さかったころはいつも兄たちが私の

面倒を見てくれましたので、恩返しの意味もあって、家でのただ一人の女手として家事万端をとりしきっていくつもりでしたが、せっかく習った裁縫の腕を無駄にしても勿体ないというところで、市内に住んでいた兄にも勧められて、当時市内にあった織物工場に勤めることとなりました。勤務先は、「米織」という米沢織専門の機織はたおり工場でしたが、そこにも四年間勤めました。

当初の一年間は、子守りが仕事でした。次いで二年目は見習いで、三年目からやっと機織機を一台任せられて布織りをしました。男性は一人で二台ぐらいをまかされて受け持っていました。女の子はほとんどの人が一台をあてがわれて織っていました。このころは昭和の初期の不況不作で、農家の一番苦しいときで、女性にまつわるいろいろな哀しい話などが各地で起きていて、私の工場でも楽しかったという思い出はあまりありませんでしたが、『女工哀史』とか『あゝ野麦峠』などという小説で書かれているような悲哀はありません

んでした。

昭和十二（一九三七）年、二十歳になった正月に、私に縁談が持ち上がってきました。この話も最初に私に持ち込まれた話ではなく、兄たちの間ですでに決められていて、最後に当事者の私に話を打ち明けてくれたのでした。その人は、満州開拓での第一次武装移民団として弥栄村イノサカムラに移住していた、親せきの斎藤今朝雄という人で、お嫁さん探しに帰って来ているのでした。そのお嫁さんとして私に白羽の矢が立って、どうかという膝詰めの話でした。

親類でもあり、兄たちが決めていた話でもあり、そのうえに当の相手が今、満州から帰国していることでもあり、話は私の気持ちなどには関係なくとんとん拍子にまとまり、結婚式を挙げることとなってしまうました。

二月の初めには、新婚夫婦として主人と一緒に弥栄村に向かうこととなり、新潟港から船で朝鮮の清津港に渡りました。主人と共に、家族を迎え

に帰国していた遠藤さん一家と、同僚の宍戸さんの甥の宍戸一さんを加えての賑やかな旅で、生まれ故郷の米沢市から出たことのない私にとっても、寂しいとか、不安だとかという気持ちもなく、むしろ楽しいような気持ちの方が強かった感があります。

清津からは鉄道で鮮満国境を越えて、凶們を経由して牡丹江^{ポダンコウ}に向かいました。牡丹江駅に着いたころは日暮れとなり、当時、夜間は汽車が走らないとのことで牡丹江の旅館で一泊しました。その旅館は日本人の経営している日本式の普通の旅館だったと記憶しています。

翌朝、牡丹江から図佳線で弥栄駅に向かって北上し、夕方になってようやく弥栄駅に到着しました。駅頭には、主人の兄になる齋藤藤助さんが、馬車を御して迎えにきていました。馬車に揺られて山形部落に到着しました。日はもうとつぷりと暮れていて、辺りは静まり返っていましたが、すぐに山形四班の四軒長屋のうちの一軒に入りました。

た。そこが私たちの新居でした。一番端が我が家で、隣は佐藤末児さん一家、そしてその隣が高橋喜吉さん一家、私の家と反対の端が、大滝十三郎さんで、この四軒が同じ組ということでした。主人は、最初は他の場所に入地したのですが、梅津さんという方が、兄さんが亡くなり内地に帰ったため、その後に移ったとのことでした。

二 山形部落での出来事

満州という遠い異国に来て、一番心細かったことは言葉で、現地の人との話ができなかったことでした。現地の満人に話しかけても「ちんぶんかんぶん」で、全然、意志が通じず、これにはほとんど困り、悲しくもなってきました。

山形部落には、私と同じ開拓の花嫁の先輩が大勢おられましたので、その人たちの話を聞き、見様見まねでやるしか方法はないと思うようになりました。

開墾の仕事は、主人と一緒に満人の苦力^{ククリ}を雇って畑作りからはじめました。満馬二頭を飼い、そ

れをひいて土起こしをして耕しましたが、私のできることは野菜の栽培ぐらいが精いっぱいでした。当時は、まだまだ本格的な農業経営には程遠い状況でしたが、それでも若かったので一生懸命に頑張りました。

そのころは、弥栄村全体ではまだ建設作業の方が盛んに進められている時期でしたが、その間にも匪賊の襲撃があり、度々、銃での撃ち合いをする戦闘もあって治安は良くありませんでした。

それでも、弥栄村役場のある孟家^{モンジャウ}周辺の治安はある程度は維持されていましたが、ここ山形部落^{ヤマガタ}では、部落の奥の方に砂金が産出する金鉱があったので、それを狙って匪賊の出没が頻繁にあり、日夜、安心することはありませんでした。

開拓団の建設のために、村や組合が主体となつて、青森部落の奥地にある魚梁子^{ユイリヤンズ}という所で材木の伐採をしていて、それを村の製材所に運んでいました。ここを松山と言っていました。松山での伐採作業は治安の悪い状況のもとでの作業で

あったために、各部落では団員が交替で警備要員を差し出して、作業場の警戒に当たっていました。ちょうど、山形四班に警備要員差出しの割当があり、くじを引いた結果、佐藤さんと三原さんが当たったのですが、三原さんの本業は大工さんで、その日どうしても手の離せない仕事があつて、主人に代わって欲しいと頼みに来ました。そのころ匪賊の動きが活発になっていて、松山襲撃の情報もあつたので、みんなは正直なところあまり警備に行きたくなかつたようでした。主人も、危険なことは百も承知していましたが、真面目な性格であり、頼まれたら嫌と言えない性分でしたので、まさかあんな事になるなどは夢にも思わず、二つ返事で交代することになり、佐藤さんと一緒に出掛けたのです。

思い掛けない不幸な出来事は、昭和十二年十二月九日の真夜中に起きたのです。松山伐採班の宿舎が、約二百人の匪賊に取り囲まれて襲撃を受けたのでした。多勢に無勢の戦いで、開拓団側は戦

死者六人、負傷者数人を出してしまったのでした。不幸にも、その戦死者六人の中に主人も入っていたのです。米沢で結婚し、ここ弥栄村の山形部落に来てまだ十カ月というのに、何という不幸なことか、こともあろうに主人を失うという事態になったのです。一緒に出掛けた隣の佐藤さんは無事でしたが、やはり山形部落の大泉竹治さんは負傷されました。

そんな惨事が起きたということは露知らずに、向陽山班の方角から組合のトラックが全速力でこっちに向かってくるのを何となく見ていたが、そのトラックに乗っていた満人が、「佐藤さんは無事だったが、斎藤さんは残念だが亡くなりました！」と、息急ぎ切って叫んでいました。最初は何のことか分からずに、ぼやっとして聞いていましたが、だんだんと「斎藤さん！」という言葉が頭に入ってきて、目の前が真っ白くなってその場に倒れてしまいました。しばらくして佐藤さんの奥さんに助けられて、やっと事情をのみ込

み、佐藤さんに引きずられるようにして、弥栄病院に駆けつけました。主人は、頭を撃たれて即死の状態でした。

戦死した六人の合同葬儀が、悲しみのうちに行なわれましたが、私はまだ夢の中にいるような気持ちで、どのようにしていたか、今になっても思い出せません。まさに空白の数日となっていたようです。

しばらくしてから遺族の皆さんや弥栄村の主だった人たちと、村公署のトラックで孟家岡から数里も奥に入った松山の現地を訪れ、慰霊法要が営まれました。私もそのころになると、やっと主人の亡くなったことが現実のことであると認識をしていましたので、心も少しは落ち着き、合掌して冥福を祈りました。

すでにお腹の中には主人の忘れ形見がいて、お産の予定日も間近だったので、寒さが厳しい中を長時間トラックに揺られて、大変に苦しい思いをしたことは今になっても忘れられないことの一つ

です。その後、毎年十二月九日には、事件の記念日として村公署や開拓団本部、遺族、そして学校の先生、高学年の生徒代表などが現地を訪れて、追悼法要が営まれたことでした。

出産予定日が近付いてきましたが、主人もいないので米沢の実家で出産することとなり、義姉に付添われて、お骨を持って山形に帰りました。お骨は主人の実家の墓所に納骨し、私は分骨をいただいて、実家の仏壇に供えて供養をしていました。正月が過ぎ、春も近づいた二月の末に男の子を生みました。

しばらく産後の養生で実家におりましたが、再び弥栄村に戻ることを決心しました。今度は、赤ん坊がいますので一人での旅はできずに、幸吉兄に同道してもらいました。

主人を亡くした悲しみのまだ消えない中で出産し、そして生まれて間もない長男を抱いて、主人のいない遠い遠い満州の弥栄村に戻る二十一歳の私。その気持ちはどのように表していいのか、筆

舌には尽くせないものがありました。

どうして戻ったのか？ いろんな人にも聞かれたことです。それは、主人の甥（兄の子）になる人と、再婚するかどうかという話が持ち上がったからです。その人は当時まだ軍務に服していたのですが、近々に満期除隊になり、その後は満州で開拓に従事するということを承知していたので、それならばその人と結婚したらという話になっていたので。しかし、いざ除隊となったら満州は寒くてつらいので、開拓団に入るのも嫌だ！ と言い出して、結局は婚約解消ということになってしまいました。

そんなわけがあって、私は主人の分骨と、生まれたばかりの長男を抱いて、弥栄村に戻ったのでした。

戻ってしばらくするうちに、弥栄開拓団組の役員で山形部落の佐藤三郎さんのお世話で、組合本部に勤めることになりました。組合では住み込みで、掃除や雑役の仕事を与えられ、月給十五円ぐ

らいでした。住み込みでしたのであまりお金を使うこともなく、貯金をしていましたので、貯えも結構増えるようになりました。

長男は、十二、三歳ぐらいの満人の女の子を守りとして雇い、その子に見てもらって、私は一日中組合で働いていました。

山形部落の私の開拓地は、お隣の佐藤末児さんたちに見てもらい、現地人を雇って耕作してもらいました。いろいろと周囲の人たちの温かい援助を受けながら、寂しいなかにも平穩無事な生活が二年ぐらい続いていましたが、あるとき山形の叔母から、「あなたの相手としてちょうど良い人がいるから、一度会いに戻って来ないか」という便りをもらいました。前に書いたような事情からまだ身を固めていなかったし、周囲の人も皆心配していることでもあり、また、私自身も長男を抱えてこのままで一生を過ごすことも、寂しいことと考えていたので、思い切って再び山形に帰ることにしました。

今度は縁があって佐藤哲と再婚することになり、間に入ってくれた叔母の家で、簡単な式を挙げて再び弥栄に戻りました。新しい主人とは満州で生活するということで結婚しましたので、一緒に戻ったのです。どうして満州にこだわったのかと申しますと、亡くなった前の主人のお骨が埋められている弥栄で、どうしても生きていきたくかったからというのが本心でした。

弥栄に戻った私たちは、いったん、山形部落の家に落ち着きましたが、しばらくして再び佐藤三郎さんをお願いして、主人を弥栄開拓組合に就職させて頂きました。佐藤さんには再三お世話になり、忘れてはならない大恩人となりました。

主人はしばらくの間は、山形部落から歩いて八虎力駅まで行き、そこから汽車で弥栄駅に行つて組合に出勤していました。仕事は、最初は購買、販売の倉庫関係でしたが、その後に配給係という仕事に変わり、満人一人を使って資材・物資等の出納責任者となっていました。仕事も忙しくなっ

てきたうえ、山形部落から通勤することも大変だったので、意を決して、村公署の近くで以前青森部落の間山さんが住んでいた家を改修して、ここに移ることにしました。山形部落の土地は、今までどおりに満人に耕作を続けてもらいました。

山形部落には、個々の耕作地の他に共同の水田班があつて、朝鮮人に水稲作りを任せ、収穫した玄米は部落の人に配分していましたが、私は弥栄本村に移ってもその恩恵を受けたものでした。

三 弥栄村での生活

昭和十六年十二月八日に大東亜戦争が始まりましたが、弥栄村には戦争の影響もなく、遠いところの出来事という気分です、今までと何ら変わることはない生活が続いていました。新聞、ラジオなどが伝える戦局の緊迫した気配も、ここではほとんど感じることはありませんでした。それどころか、満州開拓の模範農村ということが、日本内地にも宣伝されて、遙か遠い内地の各地からの視察者が毎日のように来訪して、主人はその来客接待

用の物資の手配等で、何かと忙しい毎日を過ごしていました。しかし、それも昭和十八年ごろまで、十八年の暮近くになると、ここ弥栄でも物資や食糧が不足するようになり、日本内地と同じように、物資の配給制度がとり入れられるようになりました。

主人は、この配給係の主任となり、組合倉庫の物品受払いの責任者に任せられて、今までより一層忙しくなり、朝早くから夜遅くまで勤めていました。配給対象の食糧となる農産物は、開拓農家に対して供出数量が割り当てられて、収穫期になると、組合倉庫の前庭にアンペラで囲った野積み物の集積所が急造されて、大豆や麦などの供出農産物がどんどんと運び込まれましたので、主人たちは受入れ検査で昼夜の区別なしの労働でした。

こうして集荷された農産物は、大豆、小麦、大麦、トウモロコシ等で、佳木斯^{ヂャムス}周辺の軍隊、佳木斯市民、そして開拓部落などへの配給に向けられていました。

このころになると関東軍への根こそぎ動員が始まり、弥栄村開拓団の団員にも召集令状が続々と届けられて、出征して行く人が毎日のように出ました。それまでは平穩無事な弥栄の日常生活でしたので、戦局についてあまり関心を持たなかった私でさえも、日本はこれからどうなるのか？と考え出して、だんだんと不安になってきたものでした。

四 終戦前後の生活

昭和二十年八月十日、主人にもとうとう召集令状がきて、他の大勢の人々と一緒に出征してしまいました。弥栄駅頭には、弥栄の全部落から集まった出征軍人たちで、ごった返していました。ほとんどの人が、牡丹江の部隊に入隊するのとこのでした。山形部落では、体の悪かった皆川さんと、まだ適齢期に達していない国井さんの二人が男性として残りました。慌ただしく出て行く主人とは、これからの私たちの生活について話し合う時間もなく、あっという間に仲を裂かれる別れと

なりました。

弥栄警察署の大沼さんは山形県出身だったので、以前から親しくしていて、よく遊びに来ていました。その大沼さんが、十一日の夜に家に来られて、「ソ連との戦争が始まった。この辺りも戦場になる危険があるので、弥栄の人たちも一時避難することに決まった。ついては、当座の食糧と身の回り品を持って、明日十二日の朝六時までに弥栄駅に集合するように。このことを、皆さんに伝えてください」と言って帰りました。

寝耳に水というのはこんなことを言うのだと、あとになって思いましたが、まったく不意なことではびっくりし、一時はどうして良いのか案案も浮かばずに、ただ呆然自失の状態となりましたが、そのうちに気を取り直してこれではならじと、以前から決められていたいざというときの連絡係であった、私の受け持ち十四軒に伝達して回りました。

どこの家でも男性不在なので、思いもしない急

な連絡を受けて驚くばかりでしたが、集合時間の六時までには、時間がないから急ぐようにと叱咤しました。どの家でも幼い子供を抱えていて、身の回り品の準備と、食糧の手配で大変でした。私も十四軒を回って家に戻るとすぐに、八歳になっていた長男にも支度を手伝わして準備を始めました。

長男には軽い衣料品を背負わせ、米、塩、そしてお握りを袋に詰め、防寒用の衣類、毛布などと共に私が背負うことにしました。当然、家の中の家財道具は手につけられない状態でした。また、すぐに戻って来るのだからという気持ちでしたので、あまり考えませんでした。孟家崗に住んで六年、思い出のいろいろと詰まったすべての財産を残して出て行くことは、まことにつらく悲しい思いでしたが、すぐに略奪に遭うなどということは夢にも思いませんでした。一応、家の戸張りはちゃんとしておきました。

五 避難開始、そしてその実態

翌朝、準備を整えて決められた時間に弥栄駅に集合しましたが、駅の周辺はすでに各部落から集まって来た避難者であふれていました。みんなは駅に集合したらすぐに列車に乗れるものと思っていたのですが、どうして、どうして、列車はいつになってもやってきませんでした。ついに夜になりましたが、それでも順番は回ってきません。いつ乗れるかも分からないので、集合場所を離れることもできずに、駅の周辺で野宿をするしかありません。とうとう、野宿で一夜を明かしました。我が家は駅からそんなに離れていなかったのですが、ちょっと家の様子を見に戻ったところ、すでに家の中は荒らされ放題の状況で、家財、道具類はすべて持ち去られて何もありませんでした。考えてみると前日の朝、私たちが家を出るときから、すでに現地人が家の周囲にうろろろしていて、家を出るとすぐに家の中に入り込んでいたことを思い出し、何もなくなるのは当然なことで、改めて

思ったことでした。昨日まで、現地人の人たちとは仲良く付き合ってきたつもりだったのにと、悔しさをいっばいでした。第二の故郷のような愛着を持っていた弥栄の地を、いざ離れようとするときに、この有様を見て涙が出て致し方ない思いでした。情け容赦もないということは、こんなことをいうのかとしみじみ感じたものです。

私は、物心のつきはじめた八歳の男の子を連れただけだったので、他の人たちに比べれば、身軽な方でしたので、農産加工場に勤めていた菅野さんに、子供を一人面倒をみてもらえないかと頼まれました。菅野さんはご主人が召集されていて、子供が四人もいて、さらにそのうえ自身は足が不自由だったので、本当に大変な様子でした。さらに、警察署の大沼さんからも子供一人を預かってほしいと頼まれて、自分の子供一人でも大変なところを、一緒に連れて歩くことにしました。緩化スイカに着いたときに、大沼さんの子供は戻りましたが、そこまで無事だったことは何よりの幸いでし

た。

その日も、夕方になるまで避難列車は来ませんでした。

弥栄の街中では、相変わらず現地人が至る所で日本人の家に侵入しては物を持ち出し、さらに開拓団組合の売店や倉庫からも、物品や資材などを手当たり次第に略奪していました。幸いなことに、私たちは駅近辺に集まっていた、その数約千数百人の集団だったので、さすがの現地人も、ここまで来て乱暴・狼藉することはなく、無事だったのは幸いでした。

夕方になってようやく列車が来ましたが、全車両、屋根の無い無蓋車が連結されていました。各部落ごとにまとまって乗車しましたので、私たち孟家崗の人たちも、まとまって同じ車両に乗車することができました。しかし、その列車にはすでに西弥栄、八虎力からも乗ってきていて、混雑をしてみんなが乗り込むまでには大分時間がかかりましたが、列車の後方が分からないくらいに

長く連結されていました。再び、いつこの弥栄に戻って来れるのかなどと考える心の余裕もなく、ただこれからどこに避難するのかということだけで心はいっぱいでした。

弥栄駅をやっと発車した避難列車は、動いたかと思うと止まり、止まったかと思うとすぐに動き出すことを繰り返し、やっと佳木斯駅に着いたのは、翌朝でした。佳木斯市街には黒煙が覆っていて、所々から火の手が上がっていました。そして、時々大砲を撃っているような大きな音がしてびっくりしていましたが、あとで聞いた話では、火災に遭ったドラム缶が破裂する音だったそうです。佳木斯駅では、乗車したまま半日くらい停車していました。大勢の兵隊さんがいて、乾パンや缶詰を配ってくれて、子供たちも喜んでいました。

そのときの話では、私たちの乗った列車が佳木斯を出発して松花江^{シヨウカコウ}の鉄橋を渡り終えたら、すぐに鉄橋を爆破して、ソ連軍が追撃してこないよう

にするのだということでしたので、私たちは一刻も早く鉄橋を渡ってくれないものかと念ずるばかりでした。

夕方遅くなって、ようやく佳木斯駅を出発すると、間もなく雨が降りだしました。屋根の無い貨車でですから、車内にはすぐに雨水が溜まり始めました。みんなは頭からずぶ濡れになりました。現在のようにビニールの雨合羽がある時代とは異なり、傘しか雨を防ぐものは無い時代ですので、寒さ防ぎに大事に持って来た毛布や、下に敷いていた筵^{むしろ}を被るほかありませんでしたが、その程度では激しく降る雨を防ぐことができずに、濡れるがままでした。

八月半ばですが満州のことですから、ただでさえ夜になると冷気が身にしてみえますが、そのうえ雨で全身がずぶ濡れになっているので、がたがたと震えの止まらない寒気で、とてもつらいことでした。小さな子供は次から次と風邪を引き、高熱を出しはじめましたが、ひどい子は肺炎症状に

なつてしまいました。このために、みんなはすっかり体調を崩してしまいました。

朝になってやっと雨が止み晴れてきましたが、今度は八月の真夏の太陽がかんかん照りに照りつけて、湿度の高い暑さとなり、このために子供たちはさらに体調を悪くしてしまいました。

びしょ濡れの着物も着替えることもできずに、大人でも気持ちが悪くなるのに、ましてや子供では、それに耐えることなどはとてもできることではありません。雨の降る中では食事もできなかったので、空腹で過ごしていて、そのうえ蒸し暑さという悪環境のため、大人でも病人が続出してきました。つい数日前までの生活からは、想像もつかない悲惨な有様となりました。悪夢としかいえないような避難行となりました。弥栄を出てからわずか四、五日の間の出来事です。が、あまりの環境の激変で、記憶力も薄れてしまったらしく、そのころのことをあまり詳しくは覚えていません。

六 綏化での避難生活

佳木斯を出てから、多分四、五日ぐらい経ったころと思いますが、その日数は正確に記憶していません。ある駅に止まって、そこで下車させられました。そこが綏化だったので。綏化の陸軍の飛行場の格納庫が収容所になっていましたので、駅から歩かされました。濡れて重たくなっている荷物を背負い、幼い子供を抱き抱え、自分の体より大きな荷物を背負った長男と共に、一団となった長い行列に入って、ぞろぞろと歩きました。一時間以上も歩かされたような気がしますが、無蓋車での数日間の生活での疲労のうえに、重たい荷物を持った行軍で、体も心もくたくたになってしまいました。やっとのことで飛行場に着き、割り当てられた格納庫に入りましたが、つらくてもみんなと一緒に行動しなければと残り残されてしまうので、必死になっていました。

収容された所は、千人ぐらいの人が一つ屋根の下に入れられました。何の仕切りも囲いもなく、

床はコンクリートのうえに、アンペラか筵を敷いただけで、体を横にするどころか、下からの冷えが上がってきて、眠れるものではありませんでした。

この收容所の生活に入って間もなく、ラジオで玉音放送を聞き、日本が負けたことを知りました。そのときの気持ちは、筆舌に尽くすことができない程ショックでした。「戦争に敗れた日本は、これからどうなっていくのか」、「私たちはこの先、どうして生きていくのか」とか、また「ここで骨を埋めることになるのかしら」などと、いろいろなことが思い浮かんできて不安な時間を過ごすようになりました。日本が負けるなどということは爪の先程も思っていなかった日本人が、こんな姿で避難している現実を見れば、いろいろと不安が起きてくることは当然なことでした。人それぞれに思いは異なっていますが、不安な気持ちは同じでした。

しばらくすると、ソ連兵が收容所に姿を見せる

ようになってきました。しかし、そのソ連兵たちは、私たちを脅かしたり、ゆすったりして目ぼしい品物を強奪し、横暴で野蛮な行動をするだけでした。銃を持っているので反抗すると何をされるか分からないので、みんなは恐怖のどん底に落とされました。

こんなこともありました。「ソ連兵が来たので、みんな部屋の中に入れよ！」と叫んで、外で遊んでいた子供たちに声を掛けた弥栄村の人が、その態度が気に障ったらしく、ソ連兵に見付け出されて銃で殴られ、前歯を折られるような大怪我をさせられました。戦争に負けたのだから仕方がないことかもしれませんが、本当に情けなく悔しい思いをしました。

そんな状況にあるときに、弥栄から召集されて牡丹江の部隊に入った主人や山形部落の加藤さん、山形分校の林先生など、大勢の男性が私たち家族を捜してここへ来たのでした。老人、女、子供だけだった私たち弥栄グループの人に

とっては、何物にも代え難い、夢のような喜びで、顔を見ただけで今まで張りつめていた気持ちが、気が抜けたようになってしまいました。

この緩化収容所に集められた避難民は、よく分りませんが、一万人近い人ではなかったかと思えます。ここにいる間にも多くの人が亡くなりました。食べ物が無く栄養失調になった人、寒さと不衛生で伝染病などの病気にかかった人など、その原因はいろいろですが、ともかく多くの人が亡くなりました。特に、あの列車での避難が原因で体力が弱った幼な子や、乳飲み子の殆どが、ここで亡くなりました。不幸中の幸いという言葉は当てはまらないと思いますが、弥栄東本願寺の本多先生の奥様が、手厚いお経をあげて弔ってくださったことが、せてもの慰めでした。

緩化での収容生活も約一カ月経ったところに、南満に移動することになりました。これで、もう再び弥栄村に戻れるという夢は消えたと、改めて覚悟をしたものでした。山形部落は、弥栄本村団よ

り一日遅れで出発することになりました。九月も半ばが過ぎると、朝夕の寒気は厳しく、少しでも南に下がって暖かい所に行きたいということはみんなの望みでしたので、この移動は、どんなにか私たちが助けてくれたことか分りません。

再び乗った列車も、無蓋車で周りの囲いもないので、子供が落ちないように帯でくくりつけました。

列車が停車するたびに、暴民が襲って来ました。満人に混じって朝鮮人も多くいましたが、手に鎌や鋏、そして棍棒を持って集団で押しかけて来て貨車に入り込み、「手をあげろ！」と言うので、言いなりになって手をあげると、せっかくここまで大事に持っていた腕時計などを奪っていききました。そのうちに奪われる物は何も無くなり、かえって気が楽になりました。

この移動中にも子供が次々と亡くなりましたが、埋めることも思うようにならず、列車が鉄橋を渡るときに、遺体を河に投げ入れていました

が、まったく悪夢のごとき光景でした。私は長男が元気でしたので、こんなつらい思いをせずに、幸いなことでした。

やっとのことで新京（長春）に着きましたが、一日早く出発した弥栄本村団は、一挙に大連まで南下したことをあとで知りました。今になれば新京で良かったのか、大連が良かったのか判断がつかず、当時の気候温暖な大連で越冬するのと、寒さの厳しい新京で越冬するのでは大きな差がありました。

七 新京での厳しい越冬

新京では、すぐに収容施設に入りましたが、ここは以前学校だったようで、〇〇寮とか言われていました。三階建てでしたが、一階は暴民の襲撃を避けるため二、三階に収容されました。六畳一室に二家族が入り、私たちは山形三組の阿部好さんの奥さんと子供二人、それに奥さんの妹さんの四人と同室になりました。コンクリート造りの建物でしたが、内装はかなり古い物でした。やっと

安心して手足をのぼして横になれるのは久しぶりのことでした。ようやく人心地がつく生活となりました。

しばらくすると、弥栄村からの召集者も次々と新京にきました。その一人、菅野さんはここに来る途中で、親にはぐれた日本人の子供に会って連れて来ました。この子はしばらく一緒に過ごしていましたが、その子の親と友達だという人が、預かると申し出て連れて行きました。日本に帰ってからの住所を交換していただきました。引き揚げてからも連絡がとれていたとのことでした。

山形部落の大黒さんが責任者となり、同じく山形部落の広谷さんたちと共同で仕事をしました。大黒さんがお金を工面してきて、糯米もちこめと小豆を大量に仕入れ、おはぎとうぐいす餅を作って、女二人が一組となって新京市街を売り歩きましたが、予想外に買ってくれる人が少なく、一戸一戸歩いても戸を閉めたまま、何とかしなければと考えた結果、それぞれの家の前で、背負った我が子を

つねって泣かせましたら、何事かと戸を開けて外をのぞくので、そこで売り込むことにしました。が、あまり成功しませんでした。次の仕事は墓穴掘りで一穴二十円でたくさん掘りました。「他人さまのために掘ったこの穴に、明日は我が身が入るようになるかもね」などと話しながら作業をしました。最初は共同作業が主でしたが、だんだんと個人仕事になってきました。

私は、墓穴掘りの次には、薪^{まき}売りをしました。以前の日本人住宅で空き家になっている家を探し、雨戸、建具を壊してそれを薪に束ねて売り歩きました。ある日、穴戸さんと一緒に空き家に入っている所に、八路軍の兵隊が入って来たので恐ろしくなり、追いかけられながら逃げ回ったこともありました。

その後は、雑貨や駄菓子^{だか}子を仕入れて売り歩く商売を、引き揚げるまで続けました。親子三人は、この仕事で何とか食いつないで日本に帰ることができたのです。

そんな生活をしているときに、遠藤さんの奥さんが、発疹チフスで亡くなってしまいました。子供二人が残されましたが、女の子は私が預かって日本まで連れて帰りましたし、男の子は、江口さんが預かり無事に遠藤さんの実家に引き渡ししました。

弥栄村の人たちは、このようにして親や肉親を失った幼い子供たちを預かり、残留孤児とならないようにお互いに助け合って、日本に連れて帰ったのでした。二十年くらい前から残留日本人孤児の肉親探しが行われ、テレビで見ると、弥栄は本当に良かったなあと思うました。

新京での越冬中にも、亡くなる人は跡を絶ちませんが、亡くなると丈夫な男の人が荷車を借りてきて、山に運んで埋葬しました。慰留民会の人^{ひと}が埋葬場所を指定し、そこに穴を掘り、遺族は髪を残したり爪を切ったりして形見とし、身寄りの無い人はそのまま埋めました。今では、そこがどこだったか分からなくなってしまいました。寂し

い限りです。

新京での厳しいひと冬を越して、ようやく春と
なっても帰国の話はありませんでした。六月にな
り、別の集団の人たちが新京を離れましたが、ど
こから引揚船に乗るのかは知りませんでした。が、
引揚げの動きが出てきたのは確かでした。私たち
もすぐに引き揚げられるものと思って、首を長く
していました。七月の半ばを過ぎたころに引揚げ
の指示が伝えられて、みんな大喜びをしました。

弥栄を着の身着のまままで出発してから約一年の
避難生活。十数年の間、苦労に苦労を重ねて築い
た第二の故郷に戻ることもならず、無念の気持ち
でいっぱいですが、今は無事に山形に帰れるとい
うことで喜びあふれていました。

引揚げ出発当日、収容所から駅に向かうという
時になって、斎藤藤助さんの奥さんが「足が悪く
て歩けないから、ここに残る」と言い出しまし
た。子供が五人もいるので、途中で病気が悪化し
たらどうしようもないからという理由でした。

せつかく待ちに待った引揚げの出発というのに、
気の毒としか言いようがありませんでした。

その様子を見兼ねていた江口さんが、「そんな
ことを言わずに、行ける所まで行った方が良いで
はないか。あなただってここに残るよりも、行け
る所まで行ってもしも駄目になっても、それはそ
れであきらめがつくのではないか。残ったら駄目
だよ！ きっと後悔することになるから、何とか
して一緒に行こう」と励まし、説得されました。

そしてみんなで助けながら新京駅から列車に乗る
こともできて、錦州に一緒に行きました。しかし
神は恵みを与えられずに、錦州の収容所で息を引
きとられました。五人の子供も、新京で一人亡く
なり、錦州で二人亡くなってしまい、引揚船を目
の前にして、気の毒としか言いようがないこと
でした。

新京からの列車も、またまた無蓋車で、相変わ
らず走ったり止まったりで、錦州まで二日もか
かっていました。錦州に着いたらすぐに引揚船に

乗るのかと思っていきましたら、ここでも収容所に入れられました。収容された場所は日本軍の厩舎でした。一足先に引揚船に乗った人たちの後で、雑然とした場所に収容されましたが、そのころになると、もうすぐに日本に帰れるという気持ちで浮き浮きしていましたので、あまり苦になりませんでした。しかし亡くなる人も多く、朝元気だった人が下痢をしたと聞き、翌朝には野辺の送りとなった例がいくつもありました。ここまでたどり着いて、もう少しというところで亡くなるとは何たる不運かと、言葉もなくただ冥福を祈るしかありませんでした。

いよいよ引揚げの順番がきて、錦州から葫蘆島コロトウに列車移動をしました。埠頭に着くと、私たちを乗せる引揚船が停泊していて、岸壁には大勢の引揚者が待機していました。どの人の姿、恰好を見て、着たきり雀の言葉どおり、みすぼらしいものでした。

いよいよ乗船というころ、錦州でつい生水を飲

んだ主人が、不運にも葫蘆島に向かう列車の中で下痢を起こして、コレラと診断されすぐに隔離されてしまいました。出港するまでに治まらずに、ここまで一緒に来た皆さんと別れて、残ることになりました。残された人は病人ばかりで、まったく心細い限りでした。佐藤末児さんの奥さんも、このときに亡くなりました。隔離中何回も検査がありましたが、思うように回復せずに乗船の許可がありません。まだか、まだかと毎日首を長くして待っているうちに、やっと完治の告知を受けてほっとしましたが、今度は引揚船が予定どおりに入港せず、さらに数日待機させられました。

やっと乗船して葫蘆島を出港した引揚船は、三日目に九州の博多港に着きましたが、また、船内でコレラ患者が発生して再び港外に移動し、患者が完全に治るまで待機させられ、その間数回にわたって私たちもDDTをかけられて消毒と検査が繰り返されました。

一週間ぐらい足止めされましたが、船から

見える本土の青々とした山や野を眺めては、一日も早く上陸できるように祈っていました。

やっとのことで上陸ができて、サツマイモの蔓の入ったお握りが配られ、久しぶりに米の入った食事をしました。帰郷の手続き、衣料の支給などがあって、引揚専用列車に乗り込みました。

弥栄村から緩化、新京、錦州と苦難を共にしてきた皆さんと別れの挨拶を交わすのも時間が無く、慌ただしい別離で、あの悲惨な逃避行で生死の境を一緒に過ごしてきた仲間との別れのあつけないさに、後ろ髪を引かれる思いでしたが、このときを最後にして、ついに再会することができない人も多く、残念なことです。

東北地方に向かう人は同じ列車に乗りましたが、私たち一家は福島駅で下車、そこから米沢行きに乗換えて板谷で降り、前の主人の斎藤家の裏口から入り、預かってきた斎藤藤助さんの子供を渡し、藤助さんの家から引き取りに来てもらいました。また、新京で預かった遠藤さんの遺児

は、主人が遠藤さんの実家まで連れて行きました。

八 引揚げ後の生活再建

やっと親子三人になった私たちは、とりあえず主人の家に落ち着きました。昭和二十一年八月のお盆前でした。主人と二人で一生懸命に農作業などの手伝いをしていましたが、当時は農村でも食糧不足で、引揚者はみんな肩身の狭い思いでいましたので、何とか仕事を探して働かなければと、毎日毎日考えていました。

年が明けて昭和二十二年の三月ごろでしたか、山形部落で一緒だった皆川さんが訪ねて来て、「北海道に開拓に行こうという話があるが、どうだ」という誘いを受けました。山形部落で一緒だった人たち十人ばかりが参加すること、主人も参加する気持ちになり県庁に話を聞きに行つて、私には何の相談もせず一人で参加を決めて、手続きまで済ませて帰って来ました。

四月十日ごろに、主人は単身で山形の人十三人

と共に北海道に向かって出発しました。一応落ち着いた所は釧路近くの原野で、山形以外に岩手、新潟などからの参加者があって、四十人ぐらいの開拓団体になったとの知らせがありました。

私は、十月になって長男と共に主人の所に行きました。入植地は標茶駅から約十キロメートルも奥に入った場所で、以前は陸軍の軍馬補充部の放牧場だった地区で、当時はうっそうとした大木の繁る林で、昼なお暗い有様で、所々に平地があって開拓団の宿舎などがありました。主人からの手紙で想像していたとは大分違って、がっかりした気持ちになりましたが、今更どうにもならないことで、あきらめるしかありませんでした。宿舎では先住の皆川さん、栗野さんが炊事当番で、私もすぐにその手伝いをしました。男性は、畑を造るために伐採作業をしていて、その材木を丸太を横積みにした居住小屋を建設し、さらに枝木を原木にして炭を焼き、それを出荷して現金収入を図っていました。伐採跡地を、最初は

一鍬、一鍬と手起こしをして、次いで馬を使って耕すのですが、トラクターなどの機械力を使っての作業は、二十年も経ってからのことです。

根釧地方は冷害になることが多いので、酪農に力を入れることになり、我が家も昭和二十七年ごろから乳牛を飼い始めました。引揚げのとき八歳だった長男も、昭和三十五年に結婚して酪農を継ぎ専業経営に踏み切り、最初十頭ぐらいで搾乳すれば十分だったのにどんどん大型化して、今では乳牛百十頭、うち搾乳牛六十頭、生産乳量四百七十屯にまで拡大し、孫夫婦を加えて一家で一生懸命に頑張っています。大変な仕事です。

満州では、夢半ばで消えた開拓農村弥栄村を、ここで再建するという努力をしていた主人も、息子夫婦たちのおかげで、晩年は趣味の菊作りや老人会の行事に参加するなど楽しんでいましたが、八十二歳でこの世を去り、残された私は幸いにも一病息災で何とか元気に暮らしています。平和ということの有り難さを、しみじみと感じていま

す。

生まれ故郷、中国との万年平和を！

宮城県 佐々木 二郎

一 はじめに

去る平成六（一九九四）年の夏、機会を得て夢にまで見ていた私の生まれ故郷、満州への訪問団の一員として中国に行くことになった。出発するまでの間、永年の夢がかなえられることで胸を踊らせていたが、その反面心の中ではかなり不安な気持ちで渦巻いていたことも事実であった。

それは、満州で生を受けて以来十五年、特に敗戦前の約五年間を過ごした蓋平地区の周辺にあった鉱山の蛸部屋のことや、死体の埋まっていた万人坑などを思い出し、子供心にも頭にこびりついていた惨状と、戦後になって「真相はこうだ」などの暴露記事として興味本位にしかも針小棒大に

報じられていた同胞の蛮行のことなどを思い合わせる、現在の中国人に対してどのように接していけばよいのかという思いが巡り、ただ単純に懐かしさだけで諸手を挙げて訪問することにもいささかのためらいが、心の中にくすぶりだした。しかし、出発の日が迫ってくるに従って、やはり懐かしさの方が強くなり、現地に行つて然るべき人に会ったら、敗戦前に満州に生まれ、育った一日本人としてひと言謝罪をしようと思ひ、意を決して訪問団に加わつて出発した。

現地で、終始世話をしてくれたRさんという通訳がいたが、この人に話をするのが一番良いと思つてその機会を狙っているうちに、つい口に出すことができずに、チャンス^{ニヤンゼヨウ}を逸してしまった。旅行の最終地である娘々廟^{ニヤンゼヨウ}で、ここで話さないとあとがなれないと思ひながらも、とうとう口に出す勇気がなかった。

この『平和の礎』に、私のつたない引揚記録を書き始めたのも、あのときに口に出して言えな